

雪都・上越高田の宝物 日本一の雁木通り

が ん ぎ



建築家の目線から
まちづくりにかかり続けている
関由有子さん
いったん外に出た関さんが見出す
雪都・上越高田ならではの魅力
そこには
人の暮らしとかがわっているからこそ輝く
資源が息ついています



関 由有子さん

せき ゆうこ

一級建築士 あわゆき組代表

1956年、新潟市上越市生まれ。京都大学工学部建築学科卒業後、建築設計事務所へ就職。フィンランドの家具に出会い、ものづくりの力に触発されてフィンランドに留学。約3年間で、木工・家具製作の専門学校に通う。1997年に帰国後は、上越市でせきゆうこ設計室を開設。森林・林業ボランティア活動から始まる地域材の活用提案と、「雪国・越後高田」の歴史的建造物を活かしたまちづくり活動にかかわっている。

主な著書・論文に、月刊『地域開発』特集「一カルデザインから地域の未来を考える」（共著／日本地域開発センター 2013年11月号）、月刊『ゆきのまち通信』105号 上越市高田「雁木の街」夢をかたちに… 雁木と町家でまちを楽しむ（企画集団ぷりずむ 2006）

雁木は雪国の知恵の結晶

雁木というのは、主屋から張り出す軒や差し掛ける庇のことで。往來の多い街道筋や、多くの人が集う商家などが連続するまち並みにつくられました。上越地域が発祥ともいわれ、高田の現存する雁木の総延長は約16km。日本一の長さです。

「この下に高田あり」と言われたほどの豪雪地帯。それで主屋の前面に庇を張り出して、歩く空間を確保したのが雁木です。

屋根から落ちた雪や降る雪が溜まれば、往來は通れなくなり、周りが雪に覆われても、雁木の下はトンネルのようにぽっかり空いています。そんな雁木の下は細い道を人が歩いている写真も残されていて、それを見ると「ああ、本当に役立つってきたんだなあ」と思

います。雁木は、雪国ならではの知恵の結晶なのです。昔は水道や電話線も雁木の下に埋まっています。メンテナンスするにも便利ですから。さすがに水道は道路内に移りましたが、電話線はまだ雁木下にある所も残っています。

しかし、明治に入ってから火事の延焼を恐れたことから、新潟県は雁木廃止令を出しました。新潟市は雪が少ないから高田とは事情が違うこともあって、ほかの地域ではほとんど壊されていきました。それでも高田では雁木を残してきたのです。

小学校でも雁木のある昔の雪国の暮らしを教えています。昔に比べたら雪が少なくなると、雁木に対する感謝の気持ちも薄れてきました。「高田は雁木があるから発展しない」とか「車を停めるのに邪魔だ」と厄介者扱いされた時期もあります。

そうなってくると、雁木が特別のもので素晴らしい雪国の知恵なんだ、という思いも薄れます。そもそも高田の人にとってはあまりにも日常なので、わざわざ注目することも存在だったのでしょうか。

しかし、平成に入ったころからは「もうスクラップ&ビルドのまちづくりではダメだ」ということに気づいてきました。京都や金沢



右ページ、上：除雪がままならない時代は、雁木下は貴重な通り道だった。左右：雁木を支える柱や破風も、機能一点張りではなく凝った装飾が見受けられる。右の柱は、傷んだ根元部分だけを新しい材料でつくり直す〈根継ぎ〉という手法で修理されている。一番左：屋根の雪を滑らせて、道路まで落とすために用いる雪樋。雁木の屋根裏に収納される。



などの特別な古都でなくとも、高田のような地方都市にも、ようやくそういう思いが浸透してきたのです。

高田人気質

興味深いことに、雁木はそれ自体もその下の通路も、個人の所有です。つまり、自分の土地を歩道として公に提供して、歩く人のためにわざわざ私費を投じて庇をかけているのです。それは江戸時代から現在まで変わらずに続く伝統。高田の人の助け合い精神というか鷹揚さを感じさせられますね。さすがに固定資産税は免除されていますが、特別な恩恵があるわけではないのに守られ続けてきたのです。

今、新築中の歯医者さんも雁木をつくっていますが、絶対につくらなくてはいけないという条例があるわけではありません。ただ、上越市は2004年(平成16)4月から「雁木整備事業補助金」制度を始めて後押ししています。

雁木は個人の資産だから、それに市が公金を投入するには、市民が納得するようにコンセンサスを取る必要があります。それで上越市ではどれぐらいの雁木が残されているかといった調査を行ない、アンケートをまとめました。その

結果を受けて、強制力はありませんがガイドラインが定められました。

そのガイドラインに則った雁木をつくる場合には、7割を補助(限度額は間口1mにつき11万9千円)するというのが「雁木整備事業補助金」制度です。

また、雁木は各家が個々につくったので床の高さがまちまちでバリアフリーの観点からも問題があるということで、段差解消工事にも6割の補助(限度額は間口1mにつき1万8千円)が出ます。

始まった当初は「補助金が出るといったって、今さら雁木なんて」という雰囲気でしたけれど、一昨年から弾みがついてきて、4月に受付開始するとあっという間に予算枠が一杯になってしまいました。利用者が増えました。

そもそも雁木のある場所を、どうこうするつもりはないのです。だって、自分の家だけ、もとの雁木の所にはみ出すことなんてできないでしょう。

一時は家の建て替えのときに雁木をつくらぬ家が増え、少し下りて駐車スペースをとる例が多くなりました。家が連なるまち並みは、壁面線が概ねそろうことで美しく見えるのですから、こういうのは困った現象です。今まで歯抜け状態になってデコボコだった壁



面線が、雁木復活でそろっていけば、うれしいことです。

こういう補助金で復活した雁木が連なるまち並みを見て、みんな「ああ、やっぱりいいな」と思ったのでしよう。それで「じゃあ、うちも建て替えても雁木をつくらう」という気持ちになってきたようです。

豪雪地帯 上越高田

高田という地名はあちこちにあります。ここは越後の高田。人が住む平野としては、例がないほどの豪雪地帯です。そもそも、江戸時代前にはここには小さな村があっただけでした。直江津の海辺にあった福島城に入った松平忠輝が、菩提が原（高田城敷地の古名）に新たに城を築き、城下町をつくったのです。

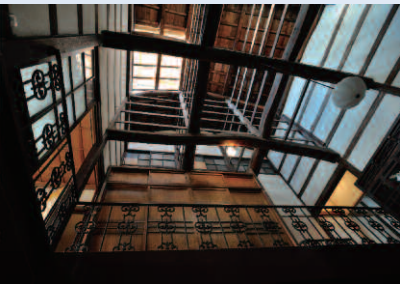
これには諸説ありますが、上越市学芸員の中西聡さんは「その背景には平和がある」と書かれています。すでに戦国の世ではなく、占いで城の位置を決めたということです。地図に福島城と高田城完成までの陣頭指揮を執った御飯屋と高田城の3点をプロットすると、南北ライン上に等間隔（2里）できれいに並びます。つまり、人為的に決められた場所だということです。そこが実は豪雪の地で、のちのま

ちづくりに苦労することになるのですが。

屋根の雪下ろしは大仕事ですから、落雪、消雪、融雪といろいろと考えられてきましたが、落雪は敷地が広くないと問題です。隣地に雪が落ちないように、あとから鉄骨造の柵を建てた例もあります。また、屋根から落ちると硬い圧雪になり、なかなか融けにくいので処理が大変です。

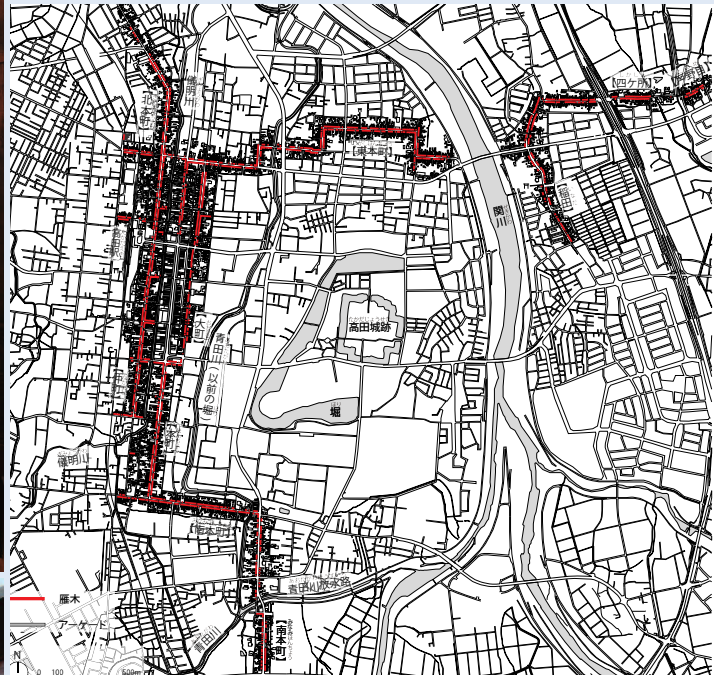
消雪パイプを屋根に上げて温水を散布すると、押し入れにカビが発生したり、湿気がこもる恐れがあります。結局、雪の重さに耐えるように主屋をしっかりとつくり、こまめに雪下ろしするのが一番確かな方法かもしれません。中越地震のときに、地震の規模に比べて倒壊家屋が少なかったのは、屋根雪を考えた頑丈な造りだったから、というのも一因です。

主屋はがっちりとした造りだから、そうそう建て替えるものではありません。しかし雁木は簡易な構造ですし、主屋の雪を受け止めて壊れもします。意外と直さなくてはならないもの。だから雁木はそれ自身が文化財で新しくしてはいけない、というものはありません。モノが文化財ではなく、システム自体が文化財ですね。雁木は、豪雪の高田で生まれた雪と共生する知恵なのです。



右下：雁木通りにある築100年の映画館（高田世界館）を見学。関さんもNPOのメンバーとして保存と活性化に尽力している。

右、上、下：国登録有形文化財〈幸村家住宅主屋〉。元・鉄工場主の住まいで、見事な樫づくりの吹き抜けと漆塗りの箱階段、渡り廊下、自作の鉄製手すりが大正期浪漫を醸し出している。現在は、貸し出されて事務所として使用。



雁木町家と雁木通りの分布（2010年）
出典：『町家読本—高田の雁木町家のはなし—』（上越市文化振興課 2010 p.1-2）



あわゆき組の誕生

雁木の残るまち並みや町家という建物に目がいつてしまいがちですが、大切な人がどう暮らしているか、コミュニティの在り方はどうか。いくらモノが残っても、人がいなくてはまち（都市）とはいえません。

私は建築家ですが、建築が人の暮らしや生き方に与える影響の大きさを考えてきました。「町家を生かして何かできないか」と考えたのが、〈あわゆき組〉の出発点です。

高田の町家の保存と活性化が話題になり始めた2003年（平成15）末から、大町5丁目から本町7丁目の住民と、まちづくりに関心のある人が町家に集い、率直な意見を交換する中で、町家公開（オープン町家）の試みが始まりました。「こんなに古き良きものが残されているのに、それを生かさないのはもったいない」「時流に流されて、どこにでもある地方都市に変わって果ててからでは手遅れ」「ここに暮らしている私たち自身が誇りに思うまちを、子どもたちに伝えたい」。そんな想いが実を結び、2004年（平成16）秋、「城下町高田・花ロード」というイベントで〈あわゆき組〉が誕生しました。

寺町のまち歩きをしてみて、お茶を飲む所がないことがわかって「甘味処をやるう」ということに。旧・麻糸商の〈高野商店〉をお借りして甘味処〈あわゆき亭〉を開店し、着物姿で大勢のお客様に町家の雰囲気味わっていただきました。

2005年（平成17）2月には〈あわゆき道中〉と題して、懐かしい角巻と雪下駄姿で雁木のまちを練り歩きました。角巻というのは雪国の防寒具。誰も着なくなつて押入の奥に仕舞われていた角巻を、県内一円から寄付していただきました。

雁木の調査に通ってきていた新潟大学の学生さんたちも応援してくれました。あわゆき組に若い男子が多いのは、こういう人たちがその後も高田にかかわってくれたからです。建築や都市計画はモノだけ調べてもダメだということが、調査しながら地元の人と触れ合うことでわかってもらえたのかな、と思います。あわゆき道中で、彼らはトンビ（インバネスコート。日本では男性の和装用コートとして用いられた）や黒いマントを着ます。観光は目的ではなく手段。あわゆき組の活動が外から人を呼び込むことで、コミュニティがつながり、ここに住む人が暮らしやすくなるとうれしいですね。

高田だからできること

高田は江戸時代から水田耕作が経済基盤であり、工場の少ない町でした。それで明治の末に陸軍を誘致したけれど、それも一時のこと。戦後引き揚げてきた人たちが寺町に住み始めたから、寺町なのにアパートがあつたりして雑然としている。ありのままの高田は、そんな歴史を持つまちです。

駅前の雁木アーケードは道路拡幅の再開発でつくられたのですが、できたあとにパブルが弾けて、今

は「本物の雁木のまち並みを残せばよかった」という反省の声も聞かれます。

ヨーロッパには、木造建築をリノベーションしながら長く使う伝統があります。それは血縁で残せないものは社会が残す、という思想があるから。建物が個人の私有財産としてだけではなく次世代に引き継がれるのは、そういう意識が強いからです。

高田でも調べてみると、景気が良くなった職人が同じ町内で大きな家に移り住んだりしていました。日本にもステップアップ住み替え

があつたのですね。こういう考えが定着すれば建物メンテナンスの意義が高まるし、軒を出して建物が傷まないように気を配ります。

また、木造は実はメンテナンスしやすいことにも気づきます。地元上越の杉の価値も高まるでしょう。高田にはスキーを日本で最初に伝えたレルヒさんや高田警女の歴史もあります。あわゆき道中では、警女唄を継承している月岡祐紀子

さんに来ていただき、三味線を弾きながら警女唄の門付をして歩いたり、スキー汁を振る舞ったりして、忘れられかけた高田の歴史を

楽しみながら掘り起こしています。

テオドル・フォン・レルヒ (Theodor Adler von Lerch 1869~1945)
オーストリアハンガリー帝国の軍人。1911年(明治44)高田第13師団を訪問して日本に初めてスキー技術を伝え指導に当たった。

高田警女 たかだしせ
厳格な師弟序列の下で三味線と唄を習い、1年の大半を巡業の旅に費やした目の不自由な女性を警女という。娯楽の少なかった昭和初期までは、毎年警女の唄を待ちわびる村々があつた。地主などの裕福な家が常宿となることで、警女たちは門付けの長旅をこなした。祝儀には現金のほか、米や豆、野菜などの農産物、真綿や和紙をもちょうこともあつたという。警女の活動は日本各地にわたるが、新潟県はその一大拠点で長岡と高田には大組織があつた。

スキー汁
明治時代、上越高田にスキーが伝えられたことからつくられた一連のもの(スキー民謡、スキー正宗、スキーせんべい、スキー小唄など)の一つ。盛んに行なわれたスキー演習の際に食事としてつくられた肉入りの味噌汁が発祥とされている。サツマイモとスキー板に見立てて短冊形に切った大根、ウサギの肉が入るが、現在は豚肉で代用される。1998年(平成10)、長野冬季オリ

ンピックに連動して始まったレルヒ祭をきっかけに、まちづくり事業として、スキー汁の宣伝・普及活動が進められている。

まち(都市)は、人が訪れて人々が交流することから素晴らしさが広がっていくものです。そんなまちの素晴らしさと心地良さは、自然や人とのつながりを大切にしてきた雪国の人々の歴史に支えられています。

中心市街地がカラッポになつてしまふ前に、まち歩きを楽しむやコンパクトシティの便利さを見直し、歴史あるまちの魅力を多くの人々に実感してほしいと願って始めたあわゆき組の活動。年々、注目度がアップして、仲間も増え、当初の願いがかなえられつつあるようです。

取材・2013年2月10日



警女唄を継承している月岡祐紀子さんが門付を再現。三味線の弾き語りであわゆき道中に花を添えた。

